

# 南コーカサス地方の新石器時代

## —アゼルバイジャン第13次発掘調査(2022年)—

西秋 良宏 東京大学総合研究博物館教授  
ヤコブ ママドフ 国立科学アカデミー考古学民族学研究所研究員  
ウルビア ヘイダロヴァ 国立科学アカデミー考古学民族学研究所研究員  
三木 健裕 東京大学総合研究博物館特任助教  
仲田 大人 青山学院大学文学部講師  
若野友一郎 明治大学総合数理学部教授  
新井 才二 東京大学文学部助教  
池山 史華 東京大学大学院博士課程  
田辺勘太郎 東京大学大学院修士課程  
宮井しづか 東京大学大学院修士課程

## The Neolithisation of the Southern Caucasus: The 2022 Excavations at Damjili Cave, Azerbaijan

NISHIAKI, Yoshihiro Professor, The University of Tokyo, Japan  
MAMMADOV, Yaqub Researcher, IAE, NAS, Azerbaijan  
ULVIYA, Heydarova Researcher, IAE, NAS, Azerbaijan  
MIKI, Takehiro Project Research Associate, The University of Tokyo, Japan  
NAKATA, Hiroto Lecturer, Aoyama-Gakuin University, Japan  
WAKANO, J. Yuichiro Professor, Meiji University, Japan  
ARAI, Saiji Research Associate, The University of Tokyo, Japan  
IKEYAMA, Fumika PhD student, The University of Tokyo, Japan  
TANABE, Kantaro MA student, The University of Tokyo, Japan  
MIYAI, Shizuka MA student, The University of Tokyo, Japan

### 1. はじめに

南コーカサス地方では食料生産経済がどのように始まり発展したのか。そのプロセス、すなわち新石器時代の考古学的研究を筆者らがアゼルバイジャンで始めたのは、2008年のことである。以来、毎年、現地調査を続けてきたが、本報告会に参加している多くの調査団と同様、2020、2021年はコロナ禍で中断の憂き目にあった。しかし、その間、それまでに発掘した二つの遺跡—新石器時代後期の遺跡であるギョイテペ、前期の遺跡ハッジ・エラムハンル・テペ—の調査報告出版に専念することができた(図1)。おかげで、二冊のモノグラフを刊行するのはこびとなったのは、それなりに大きな成果と言える(Nishiaki and Guliyev 2020; Nishiaki et al. 2021)。

しかし、とりまとめも大切なだけでなく、発掘調査は格別であることをコロナ禍中、改めて実感した。現場では毎日、新発見があり、研究の進展を日々、目にすることができる。2022年、現地調査を再開できた

ことは大きなよろこびとなった。

発掘したのはアゼルバイジャンのダムジリ洞窟である。1950年代に最初の発掘をおこなったM. ホセイノフ(Hüseynov 2010)によれば、中期旧石器時代以降、連綿と人類が居住した遺跡であったとされる。ただし、堆積は岩壁から流れ出る雨水による攪乱をうけており、層位的変遷はわからなかったとも述べられた。我々が注目したのは、攪乱層からとは言え中石器時代の遺物も見つかったという記載である。新石器時代の開始を調べるには、当然、直前の中石器時代遺跡を調べる必要があるが、南コーカサスではどういうわけか、その頃の遺跡がほとんど知られていなかったからである。当時、知られている中石器時代遺跡は古手のものばかりで、新石器時代直前のものではなかった。

そこで、2016年から2019年まで、ダムジリ洞窟にねらいを定めて発掘したところ、まさに、求めていた中石器時代の文化層が、新石器時代文化層の直下から見つかった。しかも、先に述べたハッジ・エラムハンル・テペの直前の時期にあたるものであった。つまり、



図1 関係遺跡の位置

ダムジリ、ハッジ・エラムハンル・テペ、ギョイテペ、これら三つの遺跡の調査成果を統合すれば、当地新石器時代の開始と発展を自前のデータで見通せる、当地で初めての機会が得られたわけである(Nishiaki et al. 2022)。

以上は、2019年までの調査成果である。2022年は、いまだ発掘面積が小さかった中石器時代層の発掘区を拡張し、より多くの資料を入手することを目指した。また、その下層にあると思われる旧石器時代文化層の探査もおこなった。調査期間は8月の約3週間である。

## 2. 2022年度ダムジリ洞窟の調査

洞窟はアゼルバイジャン西部のカザフ市に位置し、アヴェイ山という石灰岩山塊の東麓に開口している(図2)。標高は約560mのところにある。洞窟と呼ばれてはいるが、幅は約70m、奥行きは最大7mほどで、実質的には岩陰である。岩壁の高さは30mほどにも達していて、雨季には滝のような落水が発生する。乾季においても洞内には水が滲み出ている、周囲の植生も豊かである。したがって、緑と名水、涼を求める人々がひっきりなしに訪れる風光明媚な国指定自然文化保護区となっている、とこれまでの発掘報告で書いてきた(西秋他2021)。しかし、2022年に訪れてみると閑散としていた。焼き肉やお茶会ができる小屋には誰もおらず、ビールを買いに来る売店も閉まっている。ベンチのイスは撤去されて端に山積みされていた。コロ

ナ禍のせいかな、とまずは思ったのだけれど、聞いてみると違った。ダムジリ洞窟は貴重な文化遺産であるから、そこで飲み食い、宴会をすることはならん、との禁止令が出たのだそうだ。当局がそのように判断した理由の一部には、我々の発掘成果が話題をまいたことが関係しているのではないかと推測する。だとしたら、地元のみさんの楽しみ場を減じてしまったわけで少々、複雑な気分である。

さて、2019年までに設けた主たる発掘区は6m×5mの大きさをもつトレンチ9である。深く掘り進むにつれて作業は危険になる。したがって、発掘区は徐々に小さくしてある。中石器時代の堆積まで到達していたのは3m×3mの範囲で、そのうち中石器時代層を完掘していたのは1m×3mの区画のみであった。その範囲は地表下約4.5mの無遺物層まで到達していた。2022年は、中石器時代層の完掘範囲を拡げることが第一の目標とした。その結果、4m×3mの範囲で中石器時代層を掘りきることができた(図3)。堆積の厚さは数十センチである。新石器時代のような泥壁建物はないが、炉跡や簡単な構築物の存在を示す石列などが見つかった。また、これまでは中石器時代の居住を二つの層に分けていたが、さらに細分できるかも知れないとの見通しも得られた。放射性炭素年代測定によれば、ダムジリ洞窟の中石器時代層は前6500年から6000年までくらいである。新石器時代のギョイテペ遺跡では約200年間の堆積を14層にわけて変遷



図2 ダムジリ洞窟近景。1950年代の発掘がおこなわれた箇所。現在は舗装されている。



図3 ダムジリ洞窟トレンチ9発掘風景

を調べたのだから、ダムジリ中石器時代層の500年間の居住を2時期にわけているのでは、いかにも編年的に粗い。今回の発掘によって、編年を細分できる可能性がでたことは前進である。

もう一つ、中石器時代の地層を掘り終えた後、既に地表下4.5mまで発掘してあった当初の深掘り区をさらに掘りさげることを試みた(図4)。旧石器時代の文化層の存在を確認するためである。以前、2019年までの発掘で、中石器時代層の下にはネアンデルタール人の時代である中期旧石器の地層が見つかったと書いたことがあるのだけれど、今となっては何とも心許ない。というのは、当該層の放射性炭素年代や光ルミネッセンス年代はいずれも中石器時代の年代を示すことがわかったからである。しかし、ダムジリでは、これまで中石器時代や新石器時代の地層からネアンデルタール人の中期旧石器が100点以上出土している。その文化層はどこにあるのだろうか。さらに下層に由来したものかもしれない。それを確かめるために深掘りをおこなったのである。



図4 ダムジリ洞窟深掘り区

中石器時代層の下には粘土層が固く堆積していた。約1m掘り進め、地表下5.5mまで達したが、今のところ全くの無遺物層が続いている。土壌が粘土質であるのは雨季の落水による堆積だからなのだろう。洞窟の基盤は岩盤であるはずだから、下層に旧石器時代層が保存されているかどうか確認するにはまだまだ掘り進めねばならないに違いない。

### 3. おわりに

2022年度の調査においてはトレンチ9において中石器時代層を完掘することができた。必ずしも発掘面積は広くはないが、中石器時代文化の特徴を定義するのに十分な考古学的証拠が得られた。ダムジリ洞窟には、新石器時代層もある。それとの比較、また、ハッジ・エラムハンル・テペ、ギョイテペなどの新石器時代遺跡との比較によって、中石器時代から新石器時代への移行の経緯を詳細に語るための基盤が整った。

アゼルバイジャン西部においては前6000年頃、西アジア方面から新石器文化が急速に導入された、というのが我々の見立てである。しかし、興味深いことに新石器時代の最初期の文化には中石器時代の名残が認められる。例えば石器製作技術には連続性が認められるし、西アジアでは一般的だった土器製作が当初はほとんど導入されず中石器的な無土器生活が続いていたこともわかってきた。すなわち、新石器時代の開始は西アジアからの集団移動だけでなく、地元の中石器人が新たな文化を受け入れたことにもよるとみている。では、なぜ、そんなに急速な受け入れが可能だったのか。筆者らは、中石器時代に、既に西アジア新石器時代民と接触があり、受け入れの素地が形成されていたからではないかと推定している。この仮説を検討するには、新石器時代直前の考古学記録を詳細に分析して

いく必要がある。それが可能なのはダムジリ洞窟しかない。この幸運を最大限にいかして考古学記録の解析をすすめていきたい。

以上、この洞窟の中石器時代～新石器時代調査は一区切りである。残りの野外調査で確定すべきは、中期旧石器時代についてである。既に述べたように、多くのムステリアン石器が不確かな地層から出土している。その大元の文化層をつきとめるために深掘りを次年度以降、継続したいと考えている。

2022年度の現地調査は文部科学省科学研究費補助金新学術領域『パレオアジア』計画研究「パレオアジア文化史学の国際活動支援」(課題番号16K21721、研究代表者：西秋良宏)その他によって実施した。

#### ■参考文献

- ・ Hüseynov, M. 2010 *The Lower Paleolithic of Azerbaijan*. National Academy of Sciences of Azerbaijan, Baku (in Azerbaijani with an English summary).
- ・ Nishiaki, Y. 2022 Damjili Cave revisited: Prehistoric excavations between 2016 and 2022. International Scientific Conference on "Azikh Cave - The Cradle of Homo genius, Mammadali Huseynov's Researches" Baku State University, Baku, Azerbaijan. December 5-6, 2022.
- ・ Nishiaki, Y., A. Zeynalov, M. Mansrov, C. Akashi, S. Arai, K. Shimogama and F. Guliyev 2019 The Mesolithic-Neolithic interface in the southern Caucasus: 2016-2017 excavations at Damjili Cave, West Azerbaijan. *Archaeological Research in Asia* 19: 100140.
- ・ Nishiaki, Y. and F. Guliyev 2020 *Göytepe - The Neolithic Excavations in the Middle Kura Valley, Azerbaijan*. Oxford: Archaeopress.
- ・ Nishiaki, Y., F. Guliyev and S. Kadowaki 2021 *Hacı Elamxanlı Tepe - The Archaeological Investigations of an Early Neolithic Settlement in West Azerbaijan*. Berlin: ex oriente.
- ・ Nishiaki, Y., A. Zeynalov, M. Munsrov and F. Guliyev 2022 Radiocarbon chronology of the Mesolithic-Neolithic sequence at Damjili Cave, Azerbaijan, Southern Caucasus. *Radiocarbon* 64 (2): 309-322.
- ・ 西秋良宏・F. キリエフ・A. ザイナロフ 2021「南コーカサス地方の新石器時代—アゼルバイジャン発掘調査(2008～2019年)—」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』51-53頁 日本西アジア考古学会。

#### 過去報告の訂正

『第27回西アジア発掘調査報告会報告集—令和元年度 考古学が語る古代オリエント—』40頁に遺漏がありました。

以下の共同報告者を追記訂正いたします。

ト半馨(東京大学大学院修士課程) BOKUHAN, Kaoru MA student, The University of Tokyo, Japan